

---

# 神々の剣

ドラゴンツリー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神々の剣

### 【Nコード】

N9386C

### 【作者名】

ドラゴンツリー

### 【あらすじ】

黒須流という武術を使う青年がある女の子との出会いにより彼の止まった運命の歯車が動き出した

## プロローグ

自然な栗色の髪に綺麗な琥珀色の瞳を持つ八才ほど少年の前に少年の父親が倒れていた。父親は一目見ただけで致命傷と分かる傷を負っていた。

二人の回りには傷を負わしたであろう数百人の兵士達と三人の騎士が囲んでいた。

少年は涙を浮かべていた、父親の方は倒れながらも回りの敵に殺気を放っていた。

その時父親の口が微かに動く、だが少年はそれを読み取ることが出来ない。

不意に少年を囲むように小さな青白い光のサークルが生まれる。

「我が最愛の息子　　の記憶を封印し・・・戦いのない時代へ誘いたまえ・・・。」

その呪文を聞いた回りの兵士達と騎士は慌てて二人に攻撃を仕掛けようとする。

「・・・お前には父親らしいことを・・・してやれなかったな・・・。だが・・・お守り代わりと言っては・・・なんだが・・・この腕輪を・・・」

そこまで言って父親は血を口から吐き出しながら立ち上がり懷から銀色の大剣の細工のついた腕輪クレイモアを少年の手に無理やりはめ、耳元で囁いた。

「滅びを知らない神々の剣・・・これだけは覚えておきなさい」

その瞬間少年は意識を失う・・・。

惜しむように少年の頭を撫でる父親だったが兵士達が寸前の所まで迫っていたので光のサークルから出る。

「我が一族の秘宝を狙う馬鹿どもめ・・・この子が時代を流離するのを黙って見ているがいい」

叫ぶようにそう言つと少年を囲むように灰色の炎が生まれる。

「ふっ・・・流石に時代を渡らせる呪文を使うと白かった炎も罪によつて灰色に穢れてしまつか・・・。」

一瞬悲しそうな顔を見せた少年の父親だったがすぐに普通の顔に戻った。

「もう少し・・・もう少しだけでいい・・・我が体よ持つてくれ」

願うように祈るように体に言い聞かせるように言葉を呟く少年の父親は、額に汗を滲ませながら兵士達を炎で牽制していた。

その時騎士の一人が炎の壁を突き抜け少年に攻撃をしようとレイピアを突き出した。

少年の父親は考えるよりも早く少年の前に躍り出した。

ザッという音とともに少年の父親の体にレイピアが突き刺さる。だが父親の顔は苦しさなど一切現れておらず逆に笑っていた。

「間に合ったようだ・・・。」

そう言つて崩れ落ちる少年の父親の後ろで虹色の穴が生まれていた。

穴はサークル内の草や土とともに少年を吸い込んだ。

その瞬間あたりを青白い光が包み込んだ、

光が収まるとそこに少年の姿は無かった。

## 一話：出会い

夢の中で青年は何故か少年の姿になっていた。まったく身に覚えのない出来事だが現実味のある夢だった。

そこにいる人間の言葉は全てフィルターが掛かったように聞こえない、そしていつも通り目の前の血だらけの男から渡される自分がいとも身につけている腕輪、そして男が最後に口にする言葉だけはいつかりと聞こえている……。だがそれもこの夢が終わると忘れてしまふ……。その言葉が終わるとこの夢は終わる……。これは・・・悪夢だ。

目が覚めるとそこは見慣れた自分の部屋であり……。ベッドの上だった。

全身汗で濡れている青年は時計を見るAM4:30……。まだ殆どの人が夢の中にいる時間だった。

もう一眠りしようかと考える青年だったが汗で濡れたベッドで寝るのも気が引けたのでシャワーを浴びることにした。

心地よい熱湯を頭から浴び汗とともに先ほどの悪夢が流れていく、浴び終わった青年は体を拭くと टीーシャツ を一枚着た。

そしてそのまま髪を乾かす……。両親とは違う栗色の髪と琥珀色の瞳を青年は見つめながら思う。

朝食は何だろ？

浴室の音に気付いた両親が起きてきた。

「おはよう、親父、お袋」

青年の挨拶に両親は笑顔で答えた。

母親の方は挨拶を済ませると台所へ行った。父親の方は青年を連れ出し離れにある道場へ行った。

ここで簡単な説明をしよう。

初めて出て来た青年の名前は黒須成二くろす せいじこの黒須家の跡取で父親である弦げんが師範を務めている、黒須流の継承者でもある。

黒須流は数百年の歴史を持つ武術で一對一であれ一対多であれ応用の効く技が多く存在している。

そして弦の最愛の妻である沙希さきもこの黒須流を少しかじっていたりする。

要するに武術一家なのだ。しかし息子である成二の戦闘のセンスは目に見張るものがあり十七歳の若さで父親の弦と並ぶほどの実力を持っている。

ついでに言うと成二は高校二年であり、ここ港町近くの北港高校に通っていたりする。

そんな経歴の成二の朝の日課が父親との鍛錬だった。

そして今まさに二人によって模擬戦が行われようとしていた。体を温め終わった二人が白い胴着を着て向かい合っていた。

「親父・・・手加減はしないぜ」

「成二に負けるような鍛錬はしておらん」

張り詰めた緊張の中先に動いたのは成二だった。

左足に力を込めて一瞬にして弦の脇に潜り込み足払いをする。

「良い踏み込みだが・・・ハッ！！」

弦は払われる対象になった足に力を込める・・・すると当たる瞬間弦の足が一瞬まるで鉄のように固くなった。

当然のことながら成二は足を払うことに失敗した。

「金剛こんこうか足が痛いぜ」

金剛・・・一瞬だけ己の体を鉄のように凄くなると金剛石つまりダイヤモンドぐらいの固さまで固めさせることが出来る技である。

だが技の効果が一瞬のみなのでタイミングを取ることが至難の技だったりする。

足を擦りながら成二は間合いを取った、だが今度は弦が攻めて来た。「見極めよっ！！」

弦は成二に向かって叫ぶと拳を固く握り拳を突き出してきた。

成二は拳を受けるのではなく流した。何故なら受けてしまうとその一瞬弦は金剛を使うので手の骨が砕けてしまうからだ。

一発でも受けたらよくて骨一本悪くて病院で寝たきり生活という攻撃が続き傍から見たら一方的な展開に見えていた。戦闘が急に終わりを告げた。それも弦のうめき声をきっかけに

飄々と立つ成二に腕を抑えて苦しむ弦腕には紫の痣が出来ていた。

「金剛攻手こんごうこうてを破るとはな・・・。」

金剛攻手とは金剛を派生した技で手を金剛で固くし攻撃すること技のことを言う、似たような技に足技あしわざの金剛攻足がある。

「まあね・・・固くなってない腕の部分を俺の得意の神威しんいで攻撃したのさ」

神威とは、攻守を兼ね揃えた黒須流の奥義の一つで独特な受け流し方により受け流された手足はダメージを溜めていき攻撃している方は初めは痛みを感じない、だがダメージが限界を超えるとその部分を焼けるような痛みが襲う技である。

「親父今日はこれくらいにしとかないか？」

成二の申し出を弦が断ろうとした時に道場の扉が開かれ沙希が現れた。

「朝食が出来たから二人とも早く来なさいね」

二人は構えを解き沙希の後について行った。

朝食のご飯と鮭の塩焼きと味噌汁を食べ終わると成二は学校に向かつて行った。

北港高校は成二の家からは比較的近いところに在り遅刻はした事が無かった。

今日もギリギリではあるが問題ないはずだった。

だがいつの世にも非常なこととは起きるのであった。

それは通っている道の近くの公園でのことだった。

いつもの平和な公園に女の子を囲むように四人の男が迫っている。その様子を見た瞬間考えるよりも先に体が動いていた。

手に持っている教科書の入った重いエナメルバックを男一人に向かって投げたのだ。

エナメルバックは鈍い音を立てて男にぶち当たり男は悶絶していた。そして女の子と男達との間に体を割り込ませ女の子を背後へ隠れさせた。

「てめえゝ何晒すんじやボケエツ!!」

怒った声で悶絶していた男が生き返り叫んだ。

「いやあゝ猥褻行為わいせつを黙ってみていられなくてね」

と頭を掻く成二だったが次の瞬間目の色が変わる。

先ほど四人組みがそれぞれナイフを持っていたのだ。

「おいお前等・・・獲物を持つって事は殺し合いをするって言うことなんだな」

ドスの聞いた声に驚いた四人組みだったが一人の男の「死に晒せつ!!」という声によって成二に向かって行った。

突っ込んでくる四人は次の瞬間目標を・・・成二を見失った、

「あらら・・・綺麗に横一列に並んでくれちゃって」

声のした背後を振り返った四人は懷に潜り込んでいる成二に見事に足払いをされる、と一緒に持っていたナイフを四人とも離してしまふ。

離れた四本のナイフの腹の部分を成二は蹴り上げる、そして起き上がろうとする四人に忠告する。

「おーっと動いたら危ないぜ」

次の瞬間四人の顔のあった部分の地面にナイフが深々と刺さっていた。

「間違えた、動かないと死ぬぜか」

その言葉に心底恐怖した四人は逃げるように公園から出て行った。

「んと・・・大丈夫？」

女の子に話し掛けた時に成二は気付いた。

「その制服・・・君って北港高校なんだ、あれ？でも君は見たことないな・・・一年生？」



容姿的にはかなり可愛い部類に入る黒髪のショートの子だったので同じ学校なら噂ぐらい聞いたことあるはずなのにと疑問を持って問い掛ける成二に首を横に振って答える女の子

「そういえば君の名前は？」

女の子が答えようとした時だった、背後から殺気を感じて成二は飛び退いた。

先ほどまで成二がいたところには竹刀が深々と刺さっていた。

「詩歌<sup>しいか</sup>に触るなアツツ！！」

怒号とともに現れたのは黒髪の長い髪を一まとめにしたポニーテールの女の子だった。

「不意打ちは卑怯だろ」

と苦笑気味で現れた女の子に目を向ける成二

「だまれっ！！詩歌に触ることはこの私、佐山五月<sup>さやま さつき</sup>が許さないっ！

！」

そう言つて五月は地面に刺さった竹刀を抜いて成二に切りかかった。

「効く耳持たずかよ・・・」

紙一重で五月の攻撃を受け流す成二、五月も相当な腕前のように竹刀を巧みに扱っている。

「五月だっけ？なかなかやるな」

「そういうお前こそ私の剣を避けるなんて一対何者だ？」

そして不意に成二が動きを止める、もらったとばかりに五月は剣を振り上げる。

無謀にも振り下ろされてくる竹刀に成二が取った行動は人差し指一本を竹刀に向けるだけだった。

「血迷ったかつ！！馬鹿者が」

渾身の一撃が当たろうとした時に成二が返答をする

「いや、全然」

すると指に当たった竹刀が根元からバキッと折れたのだった。

理由は簡単だった、成二は竹刀に向けて神威を使っていたのだった。ダメージの許容範囲を超えた竹刀は人差し指一本にも勝てず折れて

しまったのだ。

「少しは考えることだな」

「お前の名前は何だ!!」

「ん？俺の名前？ああ俺の名前は」

答えようとした時に学校のチャイムが

『キンコーンカーンコーン』

となった。

「やべえ・・・遅刻だつ!!」

すでに答えることを忘れた成二は学校へ向かって走っていった。

「ちょ、待てっ!!」

五月の叫び声はもはや誰にも届かなかった。

「ねえ五月早く学校に行かないとまずくない？」

「そうだね・・・行こう詩歌」

そして二人も学校に向かって走っていった。

## 二話：再開

AM8：52二年三組に向かって廊下を走り抜ける青年がいた。

ピシャツという勢いの良い音を立て青年は扉を開ける。

教室中の視線が一気に青年に集中する、青年は苦笑いを浮かべて席に着こうとする。

「おい、黒須お前が遅刻なんて初めてだな・・・何かあったのか？」  
担任である木下響きのしたひびきが成二に心配そうに聞く、だが成二は「いろいろありまして」と答えるだけだった。

「さて・・・さっきも説明したと思うが黒須がいなかったのでもう一度説明しておこう・・・まだ来ていないが今日中に転校生がやってくる、途中で授業に合流するかもしれないので困っていたら助けをあげるように・・・さて俺からの説明は以上だ、ああ後五分で一限目が始まるので遅れないように」

そこまで言うつと響は教室から出て行った。

「おうっ！！成二」

話が終わるなり成二に一人の青年が話し掛けてきた。

「何か用か？」

「成二が遅刻なんて在りえない事だからな」

「在りえない事って・・・俺も一応人間だぜ、失敗ぐらいする」

「ホントか？」

「ああホントだ」

疑い深そうに青年は成二を見ていたが納得したのか離れていった。

「それにしても健司けんじの野郎ありえないなんて酷いだろ」

ぶつぶつ言いながら成二は教科書をエナメルバックから出して授業に備えた。

一限目は物理だった、まったく分からないのに話ばかり進んでいく授業に飽き飽きしながら成二は時計をチラリと見た。

時間はAM9：15まだまだ終わりそうもない、成二はすることも

無いので後ろのロッカーへ行き何故か入っている枕を取り出し机に置いて寝始めた。

成二が起きたときには、四限目の終了を知らせるチャイムが鳴っていた。

そこへ健司がやってきた、健司は殆ど強引に職員室まで成二を連れてくる。

「なんだよこんなところに呼ばれるようなこと今日はまだしてないぜ」

「その質問もどうかと思うが・・・まあいい、さっきヒビセン（響先生のあだな）が転校生らしき女の子を連れて案内してるの見たんだ」

「転校生って女の子なのかぁ・・・でもなんで俺はここに連れてこられたんだ？」

「成二は鈍いなぁ・・・いいか良く聞け転校生は二人で二人ともかなり可愛い女の子なんだ、その姿を成二にも拝ませてやる為に連れて来てやったんだ」

成二は微妙な表情を浮かべて

「なんつうーか・・・ありがた迷惑？」

健司はその言葉を無視して職員室の扉を静かに開けて這う様に忍び込む

「いいか成二絶対に大きな声出すんじゃないぞ・・・コバセンに見つかったらただじゃすまねえーからな」

「その辺は熟知してるつうーの」

そして女の子の話し声が聞こえる位置まで来た。

何だか最近聞いたような声だな？

成二は密かな疑問を抱きつつ進んでいった。

「ここから見えるぜ」

「何がだよ」と言いたくなる衝動を抑えて成二も覗き込む

だが女の子を見た瞬間成二は

「あっ！！」

という驚きの声を上げてしまった。

職員室内の全ての視線が成二とその下にかがんでいる健司に注がれる、

「あつ！！あなたは公園の・・・。」

女の子の一人が言葉を発するがそれを塗りつぶすようにもう一人の女の子が叫んだ。

「お前は詩歌に触ろうとした変態野郎っ！！」

この二人の女の子は公園であつた詩歌と五月だった。

「誰が変態だっ！！何もしてねえよっ！！」

「黙れ黙れっ！！その危ない視線を私たちに向けるなっ！！妊娠するだろっつ！！」

「てめえ・・・言いたいことはそれだけか・・・。」

怒りに肩を震わせる成二

「やる気か？いいだろう公園での決着ここで付けてやる」

そう言つて五月も何処からか竹刀を取り出す。

「一撃で決めてやるっ！！さやまりゅうけんじゅうち佐山流剣術壺の型轟かたどろき！！」

五月は竹刀をしっかりと握り回りにある机や椅子を巻き込みながら竹刀を振りぬいた。

女の力とは思えない力で振られた竹刀は阻むもの全てを蹴散らすかに見えた。

「効くかあ！！」

成二の怒号とともに鈍器がぶつかり合つた様な鈍い音がした、

「お前・・・人間か？」

そう呟いた五月の前には先ほどの攻撃を腕で防御していた成二の姿があつた、金剛を使った成二の腕に当たった竹刀は公園の竹刀のように根元から折れていた。

「そんな物じゃ俺には傷を付けられないぜ・・・何てつたつて俺の体は鉄みたいに固いからな」

ここぞとばかりに五月を馬鹿にする成二だったが次に五月が取り出したものを見て驚いた、

「鉄か・・・ならこの金属バットならダメージを与えられるかもしれない」

そう言つて何処からか取り出した金属バットを振りかぶる五月、慌てて金剛を使った成二だが足にまで力を入れていなかったため吹き飛ばされる。

机に頭から突つ込む成二・・・それを笑う五月、ノックアウトしただろうと思ひ五月は金属バットをしまおうとする。

「つう・・・なかなかやるな」

その声を聞いて五月は成二を吹き飛ばした方向を見る、そこには机を蹴り飛ばして出てくる成二の姿があつた。

「なっ！！無傷」

あちこち制服はボロボロだったが成二の破けた服のしたの体には傷はおるか痣一つ出来ていなかった。

「しかし金属バットまで持つてるとは計算外だったぜ・・・。」

と言つた瞬間その場にいた成二の姿が一瞬にして消えて五月の背後に現れた。

「仕返しだ」

と言つて成二は五月の鼻を軽く摘む、五月が怒り振り返つてみるがそこには成二の姿が無く詩歌の隣に立っていた。

「ありやりや・・・成二が本気になつちまったな」

と今まで傍観していた健司が呟く

成二の使つた消えるような移動法は黒須流奥義である神速<sup>しんそく</sup>

神速とは初速から最高速へ一瞬にして移る移動法で100Mを11秒前半で走る成二が使うと消えたように見えてしまうのである。

だがこれをまだ完全に習得しきれていない成二には、最高速を出すことが出来ずしかかなりの負荷が足にかかるため長時間は使えない。

ついでに黒須流奥義は後一つありそれも神の文字が技の名前の中に入っている

「詩歌に・・・寄るなっ！！」

そう言つて金属バットを突き出すが怒りによつて踏み込みがずれて詩歌の方向へ金属バットが繰り出される。

「この・・・馬鹿がつ!!」

成二は怒号とともに詩歌を庇う、詩歌を庇ったせいで金剛のタイミングがずれ鈍い音とともに成二のわき腹へ金属バットの先端がめり込む。

「ツツツツツ!!!!」

成二は声にならない絶叫をだした。

五月はすぐさま金属バットをしまい成二に駆け寄つた。

「お前の体は鉄みたいに固いんじゃないのか!？」

「慌ててタイミングを取るのを忘れちゃった。」

と虚ろな目で答える成二

「し、しっかりしろっ!!きゅ、救急車を頼むっ!!」

その声を聞いた教員の一人が壮絶な戦いから我に帰り急いで携帯で救急車を呼んだ。

「馬鹿だなあ・・・こんなんで救急車を呼ぶなんて・・・。」

そう言つて五月の頭を弱々しいチョップで叩いた後成二は体を無理矢理起こし始めた。

「無理は止めろっ!!」

「そつだ成二さっきのはいくらなんでもやばい」

二人の静止を振り切つて立ち上がった成二は

「平気平気」

と言つてその場に倒れた。

成二が目を覚ますとそこには涙で目の腫れた五月と缶コーヒーを飲んでいる健司とタオルを交換する詩歌の姿があつた。

成二が目を覚まして最初に聞いた言葉は五月の「ごめんなさい」だった。

あの後職員室で詩歌に成二に助けられたことを聞いた五月はひたすら謝り続けていた。

「良いって良いって・・・それより三人とも学校は？」

「俺と詩歌って子は早退で良いってさ」

「私と貴方は三日間の謹慎だって」

「三日で済んでよかったよかった」

と笑って答える成二

「ああそうだ、成二今日俺等三人この病院に泊まっていくからな」

・・・今こいつなんて言いやがった？

「えっと・・・はい？」

「だから泊まるって」

「ちよつと待てっ！！なんで泊まるんだ！？」

「俺は友達として、この二人は原因を作ったとしてだって」

「いやあゝ許すから帰ってくれないか？」

「うゝん・・・却下」

と言うことでこの後何度か成二が健司に抗議したが受け入れてもらうことはなかった。

その夜成二の病室では、自己紹介が行われていた。

「俺は八神健司、成二とは小学校三年の時にこいつが転校してきたからの付き合いでこいつのことなら殆ど分かる」

「私は佐山五月、詩歌とは生まれたときからの仲で友達兼護衛で一応佐山流剣術っていう剣術の継承者」

「私は水野詩歌、家業で巫女みずのをしています。」

「・・・。」

「おい次は成二の番だぞ？」

「仕方ないか・・・俺は黒須成二、北港高校に通う少しからだの丈夫な以外至って平凡な高校生だ」

その説明を聞いたとき五月と健司から冷やかな視線が注がれた。

「な、なんだよ？」

「体が丈夫って言うても限度があると思うけどね・・・。」



「成二が言わないなら俺が言っても良いんだぜ？」

成二は唸るように考え込み一言付け足した。

「黒須流の継承者だ」

「じゃあさっき戦った時の技ってその黒須流の技？」

「まあな・・・始めてあつた時に使つて竹刀を折つたのが神威で職員室で攻撃を受け止めて竹刀を壊したのが金剛で最後に使つた移動法が神速」

「質問いい？」

「何だ？」

「最後に詩歌を庇つた時金剛を使わなかったのは何で？」

「金剛は一瞬しか使えない技でさっき詩歌ちゃんを庇つた時は金属バットから目を離れたせいでタイミングが取れなくて使えなかった。」

「なるほどねえ・・・。」

「さてさて自己紹介も終わったところでトランプでもするか？」

そう言つて健司は懷からトランプを取り出した。

「大富豪でいいよな？」

そして四人は大富豪やババ抜きやポーカーを楽しんだ後眠つた。

### 三話：転校生の歓迎会

血のように赤い空間で血だらけの男が自分に何かを話し掛けてくる・  
・血だらけの男は赤い地面から這い出るように何人も出てくる、そして彼等は口々に言う。

「思い出せ」「思い出すね」「おもいだせ」「おもいだすな」「オモイダセ」「オモイダスナ」と何度も何度も繰り返す。

そして次の瞬間灰色の炎が現れ血だらけの男達を一掃する、全てが燃え尽きた赤い空間に一人残される青年、だが次の瞬間炎が一箇所集まり人の形を成していく。

炎は血だらけの男と同じ姿をしているがまったくの別物のように感じられた。

不意に炎が口を開く

「・・・お前の信じた道を行け」

その言葉が終わった瞬間目の前が青白い光に包まれる・・・。

「はあはあ・・・今回の悪夢はハードすぎるぜ・・・。」

そして枕下に置いてあったタオルで額に滲んだ汗を拭く、

「少し・・・頭を冷やすとするか・・・時間は・・・AM5:12か・・・。」

成二は病室から出て屋上に上がっていった。

屋上に上がると詩歌が朝日を浴びて輝いていた。

不覚にも成二はその姿に見とれてしまった。

艶やかに光るショート黒髪が早朝の病院に吹く風でなびく、成二は無意識のうちに詩歌の背後に立っていた。

「良い風だな・・・。」

不意に背後から聞こえた声に詩歌は少し驚いたが

「うん」

と答えた。

心地よい風が二人を包み込む

「成二君は何でこんなに早く起きたの？」

「嫌な夢見ちまったから」

と恥ずかしそうに答えた。

「どんな夢？」

「上手くいえないんだけど・・・夢の中の俺は違う名前と呼ばれていて・・・いつも必ず俺の前には血だらけの男がいるんだ、その時の俺はいつも小さい頃の姿なんだけど・・・今日の夢はいつもと違ったんだ。俺の姿が現実のままでその血だらけの男が地面から何人も何人も這い出てくるんだ。そいつ等は口々に何か言っているんだ。その後はあまり覚えてないな」

「どんな名前？」

「夢の中で言われたことは全て忘れちゃうんだ・・・だから名前も分からないんだ」

「そっか・・・ねえ成二君・・・成二君は魔法って信じる？」

いきなり不可思議な事を言い出した詩歌に驚きつつ気を取り直して答えた。

「信じられないと一言では言えないかな・・・でも俺は見たものしか信じない性質だから信じられないかな」

その言葉を聞いた詩歌は少し悲しそうな顔をして

「そうだよね」

と呟いた。

二人を屋上の冷風が包む

「はくしゅんっ!!」

と豪快にくしゃみをした成二が詩歌に

「体が冷えるといけないからそろそろ戻ろうぜ」

と言って二人は病室へ帰っていった。

病室に帰ると五月と健司の二人が笑みを浮かべながら立っていた。

何笑ってんだ？

と思いつつベットに戻ろうとすると

「言ったよね？詩歌に何かしたら殺すって」

「ん？言ったかそんなこと？というより何もしてないんだが・・・」

「成二・・・骨くらいは拾ってやるからな」

すると健司は詩歌を連れてベットから離れる。

「佐山流剣術参の型疾風さやまりゅうけんじゅさん かた はやてっ！！」

と五月は言い放つと同時にまたもや何処から取り出したのか分からない竹刀で成二を叩き始めた。

一発一発は大した威力ではなかったが切り返しが恐ろしいほど早かった。

一発喰らう衝撃が来る前にもう一発くらい何処に早すぎて何処を攻撃されるかも分からず金剛でも防御が出来なかった。

「ちょ・・・シャレになつてなっ！！ぎゃあああああっ！！」

と成二の断末魔が当たりに響いたのは言うまでもなかった。

処刑が終わってから三分後健司は詩歌から詳しく話を聞いていた。

「って事は・・・屋上で偶然あつて少し話したただったのか？」

「うん・・・言うのが遅くなつてごめんなさい」

「別に良いって」

「良く・・・ねえ・・・」

ベットの上でゴミとなっていた成二がうめき・・・意識を失う

「五月もすぐに人を叩いたら駄目だよ？」

「すまない、私も少し朝だからテンションが上がってしまった」

「普通は夜に上がらないかな？」

「それよりこの生ゴミどうする？」

と健司が成二を指差して二人に問う。

「ほおつて置いたら生き返るんじゃないか？」

「駄目だよっ！！しっかり看病しなきゃ・・・」

「気にすんな詩歌ちゃん・・・後二十秒で蘇る」

そして健司は時計を指差す、針が二十秒、十九秒・・・と進み二秒、一秒、零となったところで

「うあっ！！・・・い、生きてる・・・。」

と成二が起き上がった。

「ほらな？」

その言葉を聞いて二人は苦笑する、成二は訳が分からないという様子で首を傾げていた。

「さてと・・・じゃあ退院の手続きでもしてくる」

健司の言葉を聞いて詩歌と五月は目を丸くした。

「おう、こっちは荷物でも整理しとくぜ」

自然に切り返す成二

「退院って・・・何かの冗談だよね？」

「なんで」

「だって五月の剣術を金属バットでもろにくらったんだよ？」

「これくらいの傷なら寝れば治るさ・・・それよりお前らも荷物まとめとけよ」

喋りながらベットを畳んでいく成二

「本当に頑丈なんだね」

「健康第一だからな」

「ここまできると・・・化け物では？」

と五月は一人呟いていた。

退院を済ませた成二はそのまま家に帰ろうとしたところを健司に捕まる。

「何すんだよ」

「良いではないか良いではないか」

「何がだボケっ！！」

そして詩歌と五月の手も引つ張り出して

「これから転校生の歓迎会としゃれ込もうぜっ!!」

「わ、私これから学校へ行かないと……。」

「詩歌ちゃん……学校は皆で行ってこそ楽しいものなんだよ……」

成二と五月ちゃんは三日間謹慎処分で明後日まで学校に行けないしさ、今日くらい良いじゃん」

半ば無理矢理詩歌を言いくるめるとやはり反論してきたのは五月だった

「詩歌はお前達のように育ったら駄目だっ!!学校にはなんとしても行かせなければ駄目なのだっ!!」

「でも五月ちゃん、自己紹介で言った様に詩歌ちゃんの護衛なんだろう?護衛は近くにいないと駄目じゃないかな?」

こうして五月は何も言えなくなり成二は呆然としたまま引つ張られていった。

最初に連れて行かれた場所はゲームセンターだった。

成二と五月がシューティングゲームで互いの絶技を見せ合っている中で健司は詩歌ちゃんのユーフォーキャッチャーの才能に驚かされていた。

詩歌の取った人形が健司の腕に収まりきらなくなったところで四人はボーリングへ向かった。

詩歌はボーリングがあまり得意ではないらしく殆どスコアにはGガーダーが並んでいた。

そして四人は昼休を挟んでカラオケへ向かった、カラオケでは成二の歌う曲が演歌ばかりだったので三人は苦笑しながら聞いていた。

健司は以外にもアニソンと呼ばれるものが好きらしく熱唱している健司の領域には、誰も立ち入ることが出来なかった。そして最後に詩歌と五月のデュエットで締めて四人はカラオケボックスを後にした。

その頃には日がすっかり落ちていた。

「じゃあ後は夕飯食ったら解散にするか」

そして四人は近くにあるレストランへ向かって行った。

数百メートルほど歩いたところで成二は五月の耳元で呟く

「気付いてるな？」

「ああ・・・人数は十数人つてところだな」

「このまま見逃してくれればいいんだがな」

「それはないだろうな・・・奴らはそんなに甘くない」

「奴ら？知ってるのか？」

「知ってる・・・だが言えない」

「そうか・・・だがヤバイ奴らなんだな？」

コクリと頷く五月

「五月一気に決めるぞ」

「ああ・・・三、二、一・・・行くぞっ！！」

その言葉を合図に成二と五月は後方に走っていった。

とりあえず目に見える敵は五人で懷から何か黒光りするものを出そうとしている

「銃まで持ってたのかよ・・・だが襲うんだったら出しとくんだったな」

と言い放ち成二は五人の黒光りしているもののある懷を蹴った。

五人は拳銃という鉄の塊がめり込み後ろへ吹っ飛んだ。

一方五月は木刀を何処からか出し相手の手の甲の部分の的確に叩いていく、グシャという嫌な音を立てながら潰れる手は爪が剥がれ指がイケナイ方向に曲がっていた。

そして数分後相手は誰一人として立っていないかった、用事が住んで急いで二人の所に戻ると三人の先ほどと同じ様な男が苦悶の表情を浮かべて横たわっていた。その回りには拳銃と思われる部品が散らばっていた。

「危ないぜ二人ともか弱い詩歌ちゃんとか俺を置き去りにするなんて」「か弱いって・・・何でもそのものの構造を理解して壊しちまうことが出来てしかも一晩で族を潰した喧嘩馬鹿な奴の言うことかそれ？」

「酷い言いようっだな・・・俺はせつかく合コンで知り合った女の子を横から取るうとした族の頭にむしゃくしゃして潰したただけだぞ？」

「あーそーかいそーかい」

「ところでこいつら誰？」

「しらね」

「じゃあ放置で良いよな？」

「良いんじゃないか？」

いまいち二人の乗りに着いていけない詩歌と五月だった成二と健司がそのまま進んでいったので急いであとを付いて行った。



#### 四話：解散後に・・・

色々とおつたが無事レストランへ着いた四人は店員に注文を言い料理が運ばれてくるのを待っていた。健司はコップに入った水を一口飲むと意を決したように質問を始めた。

「成二に聞きたいんだが・・・いつの間にあんな危なそうな連中に喧嘩を吹っかけたんだ？」

「俺は平和主義者だから喧嘩を売った覚えはないんだがな」

「その言葉・・・どの口が言う？」

「この口」

と成二は自分の口を指して見せ、健司は頭を抱える。

「でも良かった良かった、あんな大したことのない連中で」

「拳銃は少しびびったけどな」

「それをぶっ壊したお前が言うか？」

「それもそうだな」

そして二人は大声で笑いあつた。

「あの・・・お二人は銃が怖くないんですか？」

二人の行動に疑問を溜め込め切れなくなった詩歌が質問をした。

「怖い、怖くないで言ったらやっぱり怖いな・・・でも所詮は鉛玉が真っ直ぐ飛んでくる止まりだろ？だったら五月の剣術みたいに変幻自在で避けにくい方が脅威だな」

「そうだな、俺も五月ちゃんの手術を避けられる自身はないからな」

と二人は五月の方を見る。五月は外をしきりに警戒しているようだった。そして二人の目線に気付くと睨みつけてきた。

「なんか用か？」

「いや、別に」

と成二と健司は声を合わせて答えた。

少し疑った五月だがまた元の様に見始めた。

そこへ店員が料理を運んできた。

「鮪の漬け丼のお客様」

それに軽く手を挙げて五月が答えた。

「カキフライ定食のお客様」

次に健司が手を挙げた。

「トロトロ卵雑炊のお客様」

その次に詩歌が手を挙げた。

「灼熱地獄鍋のお客様」

最後に成二が手を挙げた。

食事が始まったが一人を除いた三人は全く料理に手をつけようとなない。

「おい・・・頼むから俺がいる時にそれは頼まないでくれよ・・・」

「目、目が痛い・・・」

「成二君・・・喉とか痛まないの？」

真つ赤な鍋に一心不乱に挑む成二は額に汗を滲ませながら詩歌の問いに親指を立てて答える。

数分後三人が料理に手を付ける前に成二は灼熱地獄鍋を食べ終えた。

「うまかったあ・・・」

満足そうにポンポンと腹を叩くと回りの三人がまだ食べてないことに気付く。

「どうしたんだ三人とも、早く食うないと冷めるぜ？」

「成二の料理を見たら少し食欲が・・・」

「というよりもあれは本当に人の食べ物か！？目が匂いだけで痛くなつたぞ！！」

「もう一度病院にいつて診てもらった方が・・・怪我の後遺症で味覚が変になったのかもしれないし」

その後何とか皆が料理を食べ終えたのを見て成二が店員に食後のデザートに地獄の業火風パフェを頼もうとした時は三人が無理矢理それを止めた。

そして会計を済ませるとレストランの前で解散となった。

本来ならば成二と健司、詩歌と五月という感じに分かれて二手の道に分かれて帰る所だったのだが、健司が少し約束があると言い三手に分かれて帰ることとなった、

成二は先ほどの戦いのせいか少し警戒しつつ帰路を進んでいたが、何のアクシデントもなく家に着いてしまったので少し拍子抜けしてしまった。少し違う意味で疲れていた成二はベットに横たわるとそのまま寝てしまった。

そして少し時間は遡り<sup>さかのぼ</sup>レストランで四人が別れた所、詩歌の横に張り付くように一定の速度で歩き続ける五月だが背後に気配を感じて振り返ったと同時に木刀を取り出す。

「誰だっ！！」

薄暗くなった背後の道に向かって叫ぶ五月だった。が次の瞬間声を失う、そこには銀色の光を放つ槍を携えた健司が立っていた。

「馬鹿な・・・それは十六宝具の一つ・・・崩壊閃<sup>ほうかいせん</sup>」

「やっぱり十六宝具の事を知っていたか・・・だったらやはり成二に近づいたのは神々の剣が目的か・・・」

「か、神々の剣だ！？六本の神の作った剣がまだ残っていたのか！？」

「何だ知らなかったのか？・・・なら尚更生かしておけないぜ！！」

健司は槍を構えて突撃をしてくる、五月は木刀を捨てて何処からか真剣を取り出す。

崩壊閃と真剣が触れ合った瞬間、何の前触れもなく真剣は粉々になった。そしてそのままの勢いで槍の柄で五月の槍を払う。

「まさか知らなかったわけじゃないよな？崩壊閃の能力の一つ、触れた物質を崩壊させる。まあ生物とこれと同じ十六宝具と神々の剣みたいな特殊な力を持った者や神が作った者は崩壊させられないがな」

そして槍の刃の部分を五月の首に押し当てる。

「言え、誰の命令でここまで来た」

「・・・。」

「話が進まないな」

その時後ろで強い力の波動を感じた。振り返ろうとした時健司は横に吹っ飛ばされた。

「帰りが遅いから見に来て見れば・・・詩歌は震えてるは、五月は殺されかけてるは、いたいどうしたって言うの？」

そう言いながら暗闇から出てきたのは二十歳かその前後一、二歳と言う感じの黒髪の女性だった、服装はなんとも場違いな巫女の服装だった。

その姿を確認した五月は少し離れたところで腰を抜かしている詩歌を抱きかかえてその女性の傍に行った。

そして槍を杖のようにして健司も出てきた。

「痛いなあ・・・ってかお姉さん誰ですか？」

お姉さんという言葉に機嫌を良くしたのか女性は堂々と答えた。

「私は対魔専門会社社長、水野幸子みづのゆきこよっ！！よくも私の可愛い妹と有能な社員を傷つけてくれたわね、というか・・・あなたは誰？」

「俺は、八神健司・・・『普通』の高校生だ」

「最近の高校生はそんな物騒なものを持つのか？それと私が聞きたいのは所属よ」

「所属は無しだな一応・・・というか・・・こちらこそすまないな」  
そう言つて健司は距離を取り、槍を突き刺して手を上に挙げて降参のポーズを取る。

「何のつもりかしら？」

「見て分からないのか？」

「分かっているわ・・・でも裏がありそうだからね」

「裏なんてないぜ？ただ俺は、なんとなく教えられた危険な奴らとは違う気がしたから降参しただけだ」

「教えられた奴らって？」

「この世に存在する対魔組織でも最大規模を誇り尚且つ他の対魔組織を追隨させない戦闘力を有する、殆ど全ての十六宝具と神々の剣

を所有する対魔組織の奴ら・・・どう考えてもあんた等じゃないだろ？」

「じゃあ私たちが弱そうだから信用したと？」

「そういうこと」

その後無言で幸子は健司の近くにより・・・健司を殴り飛ばした。

「減らず口を叩くと・・・長生きできないわよ？」

「よく分かりました」

ボロボロになった健司は槍を幸子に奪われ縄で縛られていた、

「お姉さん・・・今から何処に行くんだ？」

「私たちの本拠地・・・と言っても普通にただの神社ね」

そして健司は車に乗せられて連れ去られていった。

## 五話：運命は突然に

「おいおい、ホントに神社じゃん。」

呆れたような驚いたような声で目の前に広がる広い神社を目にしなが  
ら健司はボソツと呟いた。

「その捕虜ぼさつとしてないでついて来なさい」

幸子にそう言われた健司は「俺は捕虜あつかいっすか」と悲しくな  
りながらも渋々幸子の後をついていった。その後ろには今だムスッ  
とした五月とおぼつかない足取りで崩壊閃を持ちながら歩く詩歌の  
姿があつた。

「しつかり聞かせてもらうからな、あなたの正体もさっき言いかけ  
てた成二の話もな」

右手を腰に当て左手の人差し指を健司を向けたポーズで五月は言っ  
たのだが、そのポーズが某アニメ悪役の登場シーンのポーズと被っ  
て見え健司は思わず吹いてしまった。

「言うか言わないかは俺が決めることだ、まあ一晩付き合ってくれ  
るなら・・・口が滑っちゃうかもしれないけどな」

健司の言葉に五月の顔は真っ赤になり、無言で反応する間も与えず  
殴り飛ばした。

「ほらほら五月ゴミを増やすんじゃない」

幸子の言葉に五月は「すまない」と言い健司は「捕虜からゴミに格  
下げっすか」となにやらうめいていた。

そして大した抵抗もしないまま健司は神社の中まで連行された、幸  
子はそのら辺に健司を座らせると左右に五月と詩歌を座らせると口  
を開いた。

「さて・・・確か八神健司だったわね？この二人と知り合いみたい  
けど関係は？」

「恋びつ・・・のあつ!!」

恋人と言おうとした健司を五月の拳が襲った。

「幸子さん、こいつはただの学校の知り合いです」

と五月は沈黙した健司の代わりに答えた。

「へえ・・・じゃあ成二って子も同じ学校なの？」

幸子の問いに五月は小さく「はい」と答えた。

その後も簡単な質問が続いたが、好きな女の子のタイプや好きな料理など意味の無いことに対しては積極的に答えるが出身地や両親の話になるとノーコメントを通した。

「それじゃあ後三つだけ質問、崩壊閃は何処で手に入れたの？教えられたって言ってたけど誰に？そして成二って子が神々の剣と関係あるってチラツと聞いたけどどういう意味？」

「全部ノーコメントって言いたいけど、少しだけ迷惑かけたみたいだしヒントぐらいなら教えてやるよ、崩壊閃は生まれた頃から近くにあった、んで教えられたのはこっちの業界でも中々有名な俺の武術の師匠、そして成二のことだけど時が来れば自ずと分かる。」

そう言うのと健司は軽く腕を動かす、すると手を縛っていた縄が粉々に弾けとんだ。驚く三人をよそに軽く踏み込み一瞬で三人の近くに寄ると崩壊閃を詩歌の手から取り握って肩に担いで「また明日学校で会おうな」と言って走っていった、呆然としていた三人だったが五月は我に返り健司を追いかけようとしたが幸子がそれを止めた。

「本当の実力もまだ見極められていない危険な相手よ、迂闊に追う事は無いわ。それにこちらに危害を加える気は無いようだし、まあ大丈夫でしょう。」

五月もそう思ったのか黙って従った。

「それにしても崩壊閃か・・・これに私たちの持っている二つの宝具と一つの神々の剣、あの組織が八つの宝具と三つの神々の剣を所持と・・・。後不明な十六宝具は五つ神々の剣が二つ、これに成二って子に関係ある神々の剣が一つだから神々の剣は後一つ、もし崩壊閃と成二って子に関係ある神々の剣がこっちの手に入ったらやつ等に対抗が出来るかもしれないわね」

と呟くと幸子は不適に笑った。

その日の夜五月は境内に一人立っていた。

「健司は完璧に崩壊閃を使いこなしていた・・・私はこれを使いこなせるのだろうか、否使いこなさなければ」

そう言つて五月は紫色の光を放つ刀を取り出した。その光は綺麗だが気持ち悪く、神々しいが禍々しかった。

「反転狂月よ、はんでんきよつげつ私はお前を使いこなして見せるぞ」  
そう言つて五月はその刀を静かに抜いた。

次の日の学校で成二の様子がかなり変なのに五月と詩歌は驚いていた、よもや昨晚の事を健司が言つたのかと思ひ問いただしたが健司は「見てれば分かると」言つて笑みを浮かべていた。

そして時間は過ぎ四時間目が後数分で終わると言ふ時だった、時間が経つにつれ成二の様子が悪化しているのに気付きただ事ではないと五月は目を光らせていた。そして四時間目の終わりのチャイムがなつた時だった。挨拶が終わつた瞬間を狙つかのように健司は教室を飛び出した、その様子は狙つていた獲物が隙を見せた時の狩人に酷似していた。

呆氣に取られている二人を健司が何処かへ連れて行く、連れて行かれた場所は食堂だった。そして食堂のカウンターに大量のプリンを抱えた成二の姿があつた。成二の周りにはプリンを奪おうとハイエナのように纏わりつく男子達がいたがその全てが成二の殺人的な眼光により奪うという行動を取ることが出来なつた。

「な、なんなの!？」

「健司君、成二君は何を？」

詩歌の質問に健司は笑いながら説明を始めた。

「成二には大好物が三つあってね、激辛料理と寿司とプリンがそうなんだけど。この学校の食堂で一週間に一度作られる特製プリンが安いうえにかなり美味くて成二も大好きなんだ、しかも成二はこの



学校に八割がたプリン目当てで入学したぐらいなんだ、要するに今日成二の様子が変だったのはプリンが楽しみだったからなんだよ。」

詩歌は変だった理由に思わず笑ってしまい五月は呆れてしまった。そこへ最高の笑みで成二がやってきた、手には戦いの戦利品である大量のプリンが抱えられていた。

「あははっ！！このツヤツヤした輝き、絹のように滑らかな肌・・・俺はここに宣言するっ！！いつかプリン教を作ってプリンについて解明し尽くしてやるっ！！」

「成二、まあ頑張ってくれ」

と成二の肩に手を置いて健司が答えた。

そして四人の楽しい昼食が始まった、朝から警戒していた五月も健司が何のアクションも起こさないので気を張るのをやめていた。

「んで成二、お前そのプリンいつもより結構多いけど全部食べ切れるのか？」

「余裕だ」

そして宣言どうり成二は全て残さず食べきってしまった。

「やっぱり化け物だな・・・」

と五月が呟いたのは当然というものだろう。

その時成二は腕の辺りが熱くなっているのに気付き咄嗟に押さえた。だが全く熱さはなくならず逆に激しくなる一方だった。頭の中に何かが浮かび上がり消えていく

「いったいなんなんだ！！」

周りの声も耳に入らなくなっていた、健司や五月や詩歌が口をパクパクさせているが耳には何も入ってこない、時間が進むのがゆっくりに感じた、そして押さえる力が強すぎたあまりに破けた腕の部分から銀色の大剣の細工のついた腕輪が見える、その時に弾かれたように映像が再生されある言葉が自然と口から出た。

「滅びを知らない神々の剣・・・」

その言葉に五月や詩歌はもちろん健司さえも驚いた。そして成二は気を失った。

## 六話：目覚め

健司、五月、詩歌の三人は成二を保健室まで連れてきてベットで寝かしていた。三人の表情は皆重苦しくジツとうなされる成二を見ていた。その時沈黙を破って詩歌が口を開いた。

「私の聞き間違えならいいんですが、成二君気を失う前に『滅びを知らない神々の剣』って言っていないませんでした？」

「確かに言っていたな……。」

五月は肯定して頷いた。そして代わる様に健司が話し出す。

「滅びを知らない神々の剣、第一の神々の剣『炎天下』その力万物を破壊し万物を再生す……たとえ創造主<sup>かみがみ</sup>さえもこの理より外れることは出来ず……。まさかそんな厄介なもん持ってたとはな」

健司の最後の言葉に五月は驚いた。

「まさかお前、成二の神々の剣を知らなかったのか!？」

「どうやって知れて言うんだ? だいたい俺は成二が神々の剣関係あるのは知ってたが、六つの神々の剣のうちどれに関係しているかを知ってるなんて誰にも言っていないぜ?」

「だが、お前はっ!!」

言い争いが起きそうになったところで

「二人とも黙りなさいっ!!」

と言う詩歌の声が轟いた。そのあまりの迫力に健司も五月も思わず黙ってしまう。

「ここで言い争っても何もおきないのは分かってるでしょ?」

二人は顔を見合わせコクコクと頷く、それに満足したのか詩歌は息をふう〜とつくと「成二君がおきるように皆で祈りましょう」と気を取り直して言った。流石の健司も「少しイライラしてたんだ、ごめん」と言ってその場に座り込んだ、保健室にはまた静寂が戻り時計の針が進む音が時を刻んでいた。

不意に成二が寝返りをして左腕がぶらりとベットからたれる、その

時ベットの鉄パイプと腕にはめてあった何かがぶつかり甲高い金属音をたてた。三人は一斉に成二の方を向き腕につけてある物を見て絶句した。

「何で、何で成二がこれを持っているんだ!？」

「畜生っ!!今まで何で気付かなかったんだっ!!」

「成二君貴方っていったい・・・。」

三種三様の言葉が保健室に響き渡るがそれも一瞬の事だった。

成二は放課後に目を覚ました、成二が起きたときに目にしたのは付きっ切りで看病をしていた三人の姿だった。成二は三人に恥ずかしそうに「迷惑かけたな」と言っただけでベットから立ち上がった。そして「んじゃ皆帰ろっか」と言っただけで誰も返事はしない、思いのほか三人の顔色が先ほどより暗く感じられた。どうしたんだ?と声を掛けようとしたところで詩歌が成二に話し掛けてきた。

「成二君、これから私たち三人について来て欲しいところがあるの・・・来てくれる?」

「良いけど・・・。」

成二の言葉に「ありがとう」と詩歌は言った。そして成二は三人の後について行った。

学校の校門の前には一台の車が止められていた。

「この車に乗ってください」

詩歌の言葉に成二は大人しく従い車に乗り込んだ。次に詩歌が乗り込みそして五月が乗り込み最後に健司が乗り込みもうとして半身乗り込んだところで車が急発進した。

「ぐはっ!!」

健司は車の外に投げ出され二、三回転したところで地面に転げ落ちた。

「運転手さんいったい何やってるんですか!？」

問いただそうと成二が運転手の顔を覗き込むと運転手の顔は女で口元は笑っていた。

「すみませんね、足が滑ってしまっただけ」

と女は罪悪感の欠片も見せず、満足そうに言った。成二は「絶対わざとだ」と思いながらも長生きをしたいと思い何も口出ししなかった。

そして少し走ると車は神社の前に止まった。

「ここが、目的地？」

半信半疑に五月に問うと「そうだ」と短く肯定した。

そして成二は車から降りると二人に神社の中まで案内された。

「んで、ここで質問なんだがどうして俺はここに連れてこられたんだ？」

「姉さんが来るまで少し待っててください」

成二は詩歌に言われたとおり待った、すると奥の扉が開きそこから巫女の服装をした女性が歩いてきた。

「う、運転手！？」

思わず叫んでしまった成二に笑みを浮かべながら女性は自己紹介をする。

「私の名前は水野幸子、詩歌の姉です」

驚きのあまり言葉も出ない成二だったが驚きを飲み込み先ほどの質問をしてみる。

「どうして俺を呼んだんですか？」

「その前に聞きたいことがあります、あなたの腕についているその腕輪いったい何処で拾ったものなんですか？」

その質問に成二は黙ってしまう、そのまま結構な時間が流れついに成二は言葉を紡ぎだした。

「実は俺、八歳以前の記憶が無いんだ・・・その時には俺の腕にはこの腕輪がついていて、だから俺にもいつこの腕輪を手に入れたのか分からない」

その言葉に幸子少し困った顔をしたがポンと手を叩く

「記憶を取り戻したくありませんか？」

「そりゃ取り戻せるなら取り戻したいけど……。」

出来ないから困ってるんじゃないかと肩をすくめた成二だったが、そんな成二に幸子がいきなりお札を投げつけた。わけもわからず受け止めようとしたが思いのほか速く頭にあたった。と同時になんだが急に眠気が湧きあがり成二はそのまま眠ってしまった。

「ね、姉さんいきなり何してるんですか!？」

驚きのあまり成二に駆け寄ろうとした詩歌を幸子は手で静止させた。

「少し魔法で記憶を蘇らせてあげようと思ってね」

そう言つて幸子は札を取り出してそれに筆で何かを書くとな成二の頭に押し当てながら唱えた。

「彼の者の記憶を蘇らせて……。」「

すると札が一瞬で燃え尽きた。

「なっ!？」

驚きの声をあげると同時に幸子はその場から飛び退く、刹那成二から白い炎が噴出し包み込んだ。

すぐに三人は神社から出る、と同時に白い炎が神社の屋根を衝き抜け神社を包み込む。

「いったい何起きてるんだ……。」「

「成二君は、成二君はどうなったの!？」

「二人とも何か来る、準備しなさい」

幸子の言葉に五月は真剣を構え、詩歌は札を取り出す。

そして神社から人影が現れる。

「この世界に出るのは何年ぶりだろうな……。」「

その声は成二のもものだったが口調は全く違っていた。そして人影は三人に向かって歩み寄ってきた。

その姿は成二だった、だが成二は炎に包まれているにもかかわらず何処にも焼けた形跡が無かった。

「お前はいったい誰だ?」

五月の言葉に成二の形をした者は律儀に答える。

「我が名はモア、我が主レノンに仕える白き炎の化身なり」

「では、モアとやらに問う。レノンとはいったい誰だ？」

その言葉にモアは無表情で答える。

「貴様等の前に存在するこの身体の持ち主こそレノンなり、そんなことも知らずに我を解き放ったのか？」

そう言うともアは右腕を振り上げて勢い良く下ろす。すると背後で燃えていた白い炎が膨れ上がり津波のように三人を襲った。詩歌は札を投げて対抗しようとするが一瞬で燃え尽きてしまう、そして幸子の札も同じように燃え尽きてしまった、それを見ていた五月は真剣を投げ捨てると新しい刀を取り出した。紫色の光を放つ怪しい雰囲気の刀、反転狂月だった。

「そんな炎、切り裂いてやるっ！！」

そう言つて二人の前に出ると反転狂月を振りかぶる、怪しい音を立てながら白い炎を押さえ込む反転狂月を手に五月はモアに笑みを浮かべて見せた。

「反転狂月か、中々の業物を持っているようだな。ならば我も使わせてもらおうとしよう」

そう言つて腕輪のついている腕を前に突き出す。

「滅びを知らない神々の剣、現れる『炎天下』っ！！」

すると腕輪は形を変え大剣へと変わる、そしてその剣から放たれる眩い光によつて辺りが真昼間のように明るくなる。

「まさか、本物の炎天下とは・・・。」

五月の顔が苦虫を噛み潰したようになる。

「ついでに我の本当の姿を見せてやろう」

そうすると白い炎が集まり龍のようになった、龍は炎天下に纏わりつくと咆哮をあげる。と同時に炎天下は振り下ろされ大地を揺らす白き炎の龍の一撃が三人に迫った。避けることも防御することももう遅い三人はもはや死ぬしか道が無かった。がその時銀色の槍を持った男、八神健司が三人の前に立ちふさがる。

「崩壊閃っ！！最大出力だっ！！」

その言葉と一緒に白い炎の龍は崩壊閃に触れたところから崩壊していく、だが崩壊させている本人さえもその熱気で皮膚が焦げていた。そしてモアの攻撃を全て受けきると同時に健司はその場に倒れこんだ。

「もはや見事としか言いようが無いな、先ほどの攻撃を受けきるとは……。敬意を払って苦しませずに一瞬で終わらせてやるう。」  
そう言つてまたモアが炎天下を振り上げた時に五月は走っていた。

「健司が作ったこのチャンス、無駄にしてたまるかっ！！佐山流剣術壱の型轟っ！！」

渾身の一撃を放った五月だったが炎天下で受け止められてしまう、とそこに弓矢を取り出した幸子の姿があった。

「実はね、これも十六宝具なの、名を蒼天弓<sup>そつてんきゆう</sup>。貴方なら知っているわよね？」

先端に札をつけた矢は音速よりも速くモアを襲った、だがモアの人を超えた動体視力により矢を掴まれる、がその時札の効果が発揮され腕に電撃が走る。

「これで両腕は封じたわ、詩歌後は頼むわよ」  
頷く詩歌の手には似つかわしくない左手用短剣<sup>マインゴーシュ</sup>が握られていた。

「その柄で思いつきり殴つてやりなさい」

幸子の言葉に走り出す詩歌だが、モアもただではやられなかった。白い炎を全て詩歌に差し向けたのだ

突然のことで反応できない詩歌だったがそこに崩壊閃が飛んできて炎を崩壊させた、後ろ重くと身体を無理矢理起こして崩壊閃を投げた健司の姿があった。もう詩歌を止めるものは無かった、詩歌は一気にモアに駆け寄ると頭を思いつきり叩いた。

「ぐっ、」

という声をあげてモアは倒れた、そしてモアが起き上がる気配は無かった。

戦いが終わり、詩歌は急いで健司の怪我の手当てをした。包帯を巻き終わると詩歌は先ほどの左手用短剣を取り出して唱える。

「癒して」

すると左手用短剣は緑色の光を放ち、健司の火傷はあっという間に目立たなくなつた。

「もしかして・・・万物を癒す神々の剣、『輪廻転生』<sup>りんねてんせい</sup>？」

「そうです、まだまだ万物を癒すつてことは出来ない半人前ですけど」

とおどけながら詩歌は答えた。

「しかし、全くあんた等は問題ばっか起こして・・・。きっと他のやつ等も今回の騒動で気付いちまったぜ？」

健司の言葉に唇を噛む三人、

「結界張つといたから外への被害とか情報漏れは心配するな、とりあえずこれからのことを考えたい。俺の家まで来てくれ、神社が火事で壊れちまったからじゃしょうが無いだろ？」

そして健司は成二をおぶると三人を連れて家まで帰っていった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9386c/>

---

神々の剣

2010年10月28日07時54分発行